

ムラブリ族の移住

採集狩猟民、他民族支配、土地所有、言語文化多様性、山地民対策

坂本比奈子

要旨

2009年2月、タイ・プレー県ファイユアックの集落に住んでいたムラブリ族の約半数(60名)が、ナーン県プーファーに移住した。かつて森のお化けと蔑まれ、土地がないために他民族に搾取されてきた人々が、政府から土地を与えられるという破格の待遇で移住したことは、周辺の人々にとって衝撃的な出来事であり、謎でもあった。移住にかんする公式発表がないまま2年経過したが、移住先の現状に関する非公式情報はムラブリ族にとり望ましくないと思われるものばかりである。ムラブリ族が渴望していた土地は与えられず、森林局の日雇いで植林をしているが収入も十分ではない。他民族支配が役人支配に代わったような現状である。ユネスコは文化多様性擁護の立場からタイ政府にたいして少数民族・先住民族文化の維持・促進のための活動・政策を促す勧告を行ってきたが、このプロジェクトがユネスコの精神に沿っているとは言い難い。ムラブリ族の幸せのためにはプロジェクトの軌道修正が必要である。

1 ムラブリ族について

1.1 民族名・言語

自称は「ムラ」(mla? 人の意)。他称は、かつては「ピー・トーン・ルアン」(phi tong luang 森のお化けの意のタイ語)と呼ばれた。現在では、「ムラブリ」(mla? bri? 森の人の意)、「トーン・ルアン」(tong luang 黄色い葉の意のタイ語)、“Yellow leaves”などと呼ばれる。

言語の系統はオーストロアジア語族・モン=クメール諸語・北方モン=クメール語系。無文字言語である。詳細な系統所属については諸説ある。

1.2 歴史

ムラブリ族の歴史は複雑で起源は明らかではない。独自の精霊信仰に基づいて1970年代まで北タイの山々の原生林を彷徨いながら狩猟採集のみで生きて来たのでモンゴロイド系最後の狩猟採集民として注目を集めていたが、アクセス困難であったため、そ

の言語文化はほとんど研究できなかった。森林破壊による環境の変化が狩猟採集生活を困難にし¹、ムラブリ族が森から出て来たのは1980年代初頭である。近年では、遺伝子解析に基づく研究により、この民族が農耕民の小グループから分かれて文化後退をし狩猟採集を始めたという説が出され、議論を呼んでいる。歴史ばかりでなく、この民族の言語文化には未だ解明すべき謎が多い。

1.3 タイ国内の主な定住地と人数²

ナーン県

- ①ヴィエンサー郡ファイユアック 172名
- ②ボークルア郡プーフアー61名
- ③サンティスック郡5名

プレー県

- ④ソーン郡ターワ 36名
- ⑤ローンクワーン郡ファイホーム 82名

- 本稿で扱う「移住」とは、⑤から②への移住である。今回の移住以前には②に定住するムラブリ族はいなかった。
- ①②④⑤は同じ方言の話し手である。③はRischel(1945)のマイナー・ムラブリでその他のムラブリとは異なる方言を話し、付き合いがないため消滅寸前にある。
- パヤオ県各地に60名程度が散在しているという未確認情報がある。
- ラオスに20数名いるが³、タイとの行き来はない。

1.4 生業

生業は基本的に農業であるが、食べるに十分な土地を持たず、他民族のために働く農業労働者である。数の概念がなく年齢も数えない人々が、貨幣経済に接したのが10数年前で、金銭感覚が乏しく、他民族に搾取され、常に借金と飢えに苦しんでいる。ジャングルの中で生まれ、子供時代に狩猟採集生活を体験している年長者たちは、森への強い憧れを持ち続けている。現在も芋掘りや鳥・小動物の狩猟は趣味と実益を兼ねている。

土地を所有して自立したいという欲求は強く、ナーン県ファイユアックの住民は、キリスト教の宣教師から土地を貰えるという約束で入信した。

プレー県ファイホームでは、アメリカ人宣教師が30年前からムラブリ救済のために、森林回復の事業を行っていたが、この仕事はムラブリ族にあまり歓迎されなかった。10年前に始めたハンモック作りにはこぞって参加するようになり、販路も拡大して年収数万バートを得る人もいる。ブロックの家を建て、集落の周囲には復活した森林があり、バイクを連ねて蟹獲りに出かける姿は生き生きと楽しそうである。子供たちが学校教育を受けるようになってから10余年になり、高校に進学した子供たちもいる。

移住したグループには気鋭の若手が揃っていた。自分たちの土地を持つ必要性を感じて土地を増やし、自給できるだけの米を得ていた者もあった。2007年には初めての地方選で村議会議員に6名当選し将来の夢が広がっていた。その生活を捨てて、彼らはなぜ移住したのか。移住先でどんな暮らしが待っていたのか。現地での聞き取り調査に基づいて事件をまとめてみる。

2 事件の概要

2.1 ナーン県で起こったこと

ナーン市内に居をかまえ、主にファイユアックのムラブリを支援するドイツ人宣教師がいる。2008年8月には、彼を慕ってプレーから来た10人近くのムラブリ族の若者が、そこで職業訓練とキリスト教教育を受けていた。以下は宣教師が活動の支持者に送ったメールの内容をまとめたものである。

「2008年8月、シンリントン王女のために働いている政府高官が新しいプロジェクトの話を持ってきた。かねてからムラブリ族の置かれている状況に関心を持つ王女は、森林局に協力を要請して、ナーン市から約60キロ離れた山岳地帯にあるプーフアーに広大な森林を用意した。他民族から搾取されてきたムラブリ族もそこへ行けば自由に暮らせるであろう。食料は自給し、耕作技術が教えられる。森林の中を自由に移動してかまわない。教育は継続することが望まれる。伝統的生活を守り、作品を作って観光客に売る、というものである。役人たちは、若者たちを先にプーフアーに移住させればその後次第に親たちがついて行くだろう、と話した。2008年10月に若者たちをプーフアーに移住させ、ついで翌年2月24日に役人がプレーに行き彼らの親戚友人を連れて来た。その翌日には、新しいプーフアー開発センターの開所式が行われ、シンリントン王女がムラブリに謁見した」

そして、このプロジェクトに関し次のような感想を述べている。

「プーフアー・プロジェクトは他民族の安価な労働力であったムラブリ族を解放するであろう。彼らは自分の土地がないために、土地を所有する他民族のいいなりになっていたのだから」

宣教師がこのような見通しをムラブリ族に伝えてプーフアー行きをすすめたとしても不思議はない。そしてムラブリ族の移住は役人の思惑通りに行われたのである。

2.2 プレー県ファイホームで起こったこと

ファイホームに住むアメリカ人宣教師によると、2009年2月24日にムラブリ族の集落に、突然、森林局の車が現れ、プーフアーへ行けば食料や土地がもらえるとアナウンスした。20人ほどが取るものもとらず、ミャオ族の車をチャーターして出発した。1ヶ月後に再び森林局の車が来てムラブリ族が残して行った米を持って行った。また、

出て行った人の中には、家を建てるための資材などを購入し、そのまま打ち捨てて行った人もいたので、彼らは事前には何も知らされていなかったものと思われる。

この出来事の異常さは、政府が山地民に土地を与えると約束したことにある。これまでの政府の山地民対策は、山林を荒廃させる焼き畑農業を止めさせ、低地に移住させることであった。それが、広大な山林の中に土地を与えられるという美味しい話、それも突然の移住は、地域社会にとり大きな衝撃であった。

2.3 移住後の出来事

移住後 2-3 カ月して、ノーイさん一家がナーン県のファイユアックに戻って来た。理由を聞きに行ったが、プーファーは好きじゃないので帰って来たというだけで多くは語らない。その後、プレー県のファイホームに逃げて来た人があったが、学校の教師が探しに来て連れ帰った。この事件は人々に異常な印象を与えたようである。その後も逃げて来た若いカップルがファイホームの集落近くに潜んでいるという情報があり、約半年後の今年 1 月になって最初は夜だけ出て来るようになり、今では、何もなかったかのごとく集落の一員として暮らしている。プーファーの様子を聞いても答えない。

2.4 プーファーの現状

2010 年 2 月と 8 月にプーファーを訪ねた。現地に着いて直ちに判明することは、移住先は「広大な森林地帯ではない」ということである。森林地帯は隣接する国立公園の話で、そこはだれも居住したり勝手に立ち入ることは許されない。ムラブリ族の居住地であるプーファーは、国立公園のさらに奥にあるラオスの山並みを望む山の上にある。そこはタイ人が開墾し耕作する畑に囲まれていて、高木などほとんど見当たらない。

山頂の「プーファー開発センター」の立派な事務所に役人が常駐する。その近くにホテル並みの宿泊施設、民族資料博物館と称する建物がある。2 月には一棟だった宿泊施設が 8 月には何棟も軒を連ね、格安で泊まれるリゾート施設として人気が出ている様子が宿泊した観光客の HP からうかがえる。民族資料博物館には、様々な民族の作品が展示即売されているがどの民族の作品か明記されていない。ムラブリ族にかんする展示もない。宿泊客たちは、そこがムラブリの居住地であることには全く気付いていないようである。センター付近の山の斜面は、モデル農園になっていてムラブリたちが働いているがその様子はわからない。ムラブリ族の住居はその下の谷底にあるらしいが山の上からは何も見えない。ムラブリ族が住んでいることに気づく人はいないであろう。

センターがムラブリ族と外部者の接触を歓迎しないこともほぼ確かである。2011 年 2 月現在、ムラブリの親族といえども、あらかじめ文書で許可願を出さなければ面会できないことになっている（ムラブリ族の中高年はタイ語の読み書きはできないのだが）。2010 年 8 月には、ナーン県開発センター（旧称山岳民族開発福祉センター）の職員が

我々に同行した。最初は宿泊する予定であったが、厳しい規制の下に置かれているムラブリ族について聞いて回ることの危険性を察知して、一刻も早くここを出ようと促した。ナーン県開発センターというのは、社会開発・人間安全保障省の出先機関で、従来、山岳民族に対する定住化・保護政策の実施機関であったが、今回の移住についてはオープン・セレモニーに招かれただけで、ここで何が起きているのか全く知らなかったのである。この事実は、移住プロジェクトが省庁レベルより上のものであることを示唆している。迷惑が他に及ぶことをおそれて役人にインタビューすることは控えたが、たまたまセンター付近で仕事をしているムラブリ族の中年男性P氏に出会い、一時間だけインタビューすることができた。以下はその要約である。

- 男性は月曜日から土曜日まで働く。午前8時と午後4時に点呼があって、5人単位で仕事を割り振る。制服着用が義務付けられている。現在は森林局の仕事で植林を行っている。
- 毎日110パーツ支給される。雨の日は休みなので、雨季だと月収は2100-2500パーツ程度にしかない。月に3000パーツ以下では暮らせないが、女性は働けない。女性は家にいて、展示即売室に置くためのバッグや籠を制作している。
- 休日は、外部に働きに行くことを許可されているが、さほど仕事があるわけではない。
- 病気の治療費はすべてセンターが負担する。
- 学校は当初、地元の学校に通っていたが、現在は居住地内に学校があり、子ども15人、成人30人が学んでいる。タイ人教師が2名いる。
- 銃の所持、樹木の伐採、狩猟は禁止されている。
- 30家族でバイクは6台しかない。

P氏は、月3000パーツ以下で暮らすのは非常に困難であるということ、女性が外で働けないことについて苦情を言っていた。また、プレーにいる母親に会いたいとしきりに言っていた。しかし、不幸であるとかプレーに帰りたいとあからさまにいうことはなかった。

プーファーの現状は、「広大な森林が与えられる」という話とは明らかに違っている。移動の自由もなく、外部の者との接触も制限されているのでは、保護区というよりは、収容所に近いようである。さらにこのような状況は、民族文化保持にとって好ましいものではないことも明らかである。以下、気になる項目について検証を試みた。

3 現状の検証

3.1 言語の保持について

地球上で話されている大多数の言語は少数者の言語で、その多くは 21 世紀中に消滅するといわれている。現在、ムラブリ族の子供はムラブリ語を母語として習得しているが、話者数は多く見積もっても 500 名であるから消滅の危機に瀕した言語の一つである。標準タイ語、北タイ語、ミャオ語の複数の言語が併用され、コード・スイッチングもしばしば見られる。言語の維持が困難であるばかりでなく、集団が小さくなるほど集団自体が消滅するおそれがある。

3.2 仕事

現在、他民族の畑仕事の労賃は、平均で日に 150 パーツである。もし毎日仕事があれば月に 45000 パーツになる。労働時間は長くともムラブリにとっては収入の多い方がいい。また、多くの場合、前払いでかなりまとまった金が入る。もしバイクを購入したりして使ってしまうと、雇い主に借金をし、返済のために働くこともできる。結局借金奴隷になって行くが、雇い主は、困れば米でも金でも貸してくれるし、食べ物を用意するケースもある。収入を増やす必要に迫られて耕地を拡大してきたミャオ族や山地のタイ人は、ムラブリ族の労働力なしでは畑を維持できなくなっており、ムラブリ族を大事に扱っている。だまされたり搾取されたりしてきたことは事実であるが、それでもムラブリ族には雇い主を選ぶ自由があった。

賃金が低くても月 2000 パーツ保証されていれば生活は安定しているかもしれないが、ここから出て行くことは許されず、職業の選択肢がないということは問題である。

3.3 移動制限

狩猟採集時代のムラブリ族は小さなバンドを組んで森林を移動していた。バンドの組み替えは頻繁にあったようで、それが民族としての絆を保持していたのであろう。定住したとはいえ、絶えず人の移動がある。一家総出で、あるいは単身で遠方の畑に出稼ぎに行く場合もあれば、タイ人の部落に住みこんでいる場合もある。どこでどう暮らすかは個人の自由である。

ファイホームとファイユアックの間では婚姻関係がある。それでも配偶者探しの問題が深刻化していることを思うと、プーフアーに閉じ込められた人々の結婚問題は差し迫った問題である。ムラブリ族は生涯に何度か配偶者を取りかえる。既婚者の場合は部落から出て行ってほとぼりの冷めるのを待つのが普通である。ケンカなどの場合も悪いと言われた方がしばらく出て行く。小さな社会の中で暮らす知恵である。

人間関係の軋轢があっても出て行けなければ大変なストレスになるであろう。プーフアーから逃げて来た若夫婦の場合は、妻の恋敵であった女性の激しいいじめにあっていた。それで決死の覚悟で逃げ出して来たのである。ムラブリ族はストレスに弱いらしく気分がむらがある。大人 20 人程の集団で、長期的に閉じ込められていたらいいことはないはずである。

3.4 狩猟採集禁止

ムラブリ族は狩猟の獲物はすべてバンドの全員に分けるのが伝統であった。これが彼らの結束を固めるのに大きな役割を果たしている。今でも小動物や蜂の巣などの獲物、外部の人から豚の贈り物などがあると全員が集まって解体し家族ごとに分配する。解体や分配の指揮をとるのがリーダーである。狩猟をしなくなってリーダーの力は弱くなったといわれているが⁴、ファイホームやフワイユアックで筆者が観察したところではリーダー的な人は今でもいる。狩猟禁止、外部の人との接触禁止では、ますますリーダーの存在は希薄になり、集団としての求心力が失われるであろう。

3.5 男女の役割

プーファーの民族博物館にはムラブリ族が作るバッグと籠が展示されていた。本来、バッグ作りは女性の仕事で、籠、ござ作りは男性の仕事である。P氏は女性は家でバッグや籠を作っていると言っていたがそれが本当なら、センターはムラブリ族の伝統を無視していることになる。また、狩猟は男性の仕事であるが採集は夫婦で行っていた。畑仕事も男女の区別はない。センターが男性しか雇わないというのはいかなる理由あつてのことか理解に苦しむものである。

3.6 ユネスコの要請

ムラブリ族独自の物質文化は非常に貧しいが、精霊信仰に基づく豊かな精神文化を持っている。ユネスコは言語文化の多様性は人類文化に不可欠であるという立場から、少数民族・先住民族文化の維持・促進のための活動・政策を各国の政府に要請している。今回のムラブリ族の移住の条件に「伝統的な生活を守る」という項目があつたのはその要請に応えようという姿勢の表れであろう。しかし、現実にはムラブリ族の文化を無視し、伝統維持を困難にしていると言わざるを得ない。

4 事件の背後にある問題

4.1 タイの<山岳民族>政策

タイでは高地に住む多様な少数民族を一括して<山岳民族> (chaw khaw) とよびならわしてきた。これは文化的・経済的に遅れた人たちという差別的ニュアンスのある呼称である⁵。元来、移動性の焼畑農業を行う<山岳民族>は無国籍であり、共産主義者との内戦下では政治的不安定要素であった。政府は<山岳民族>定住化低地農民化政策を推進して順次国籍を与えて行ったが、ムラブリ族は他民族のために働く農業労働者となっても定住しないため国籍を与えられなかった。ムラブリ族といえば、外部との接触がほとんどなく裸体に近い恰好で狩猟採集をしながらジャングルを駆け回っているというイメージが今でも定着していることを利用して、森から出て来たムラブリ族は観光

資源にされたり、見世物にするためバンコクに連れて行かれたりした。そのような状況は内外の批判を浴び、2001年にムラブリ族にも国籍が与えられた。

4.2 ムラブリ族は“野蛮人”

Nan(2005:235)によると、タイの伝統的な国家観においては、タイのエリート層が文明の頂点をなし、一方“野蛮な”森の人々、とりわけ森のお化けであるムラブリ族は階層の最底辺に取り残されていた。彼らは、非タイ系民族であるためにタイ民族国家の国民とは認められてこなかった。2002年に、そのようなエリート層である役人たちは、ムラブリ族を「生きている石器時代人⁶」と位置づけ、様々な民族多様性が発展段階に応じて暮らす自然と調和した地域としてナーン市を丸ごと世界遺産に登録しようとした。今では農業労働者となったムラブリ族に相変わらずの固定観念を植え付けるような国の態度を、悪徳業者と同罪であるとNanは厳しく指摘する。

ムラブリ族が国籍を取得すると、ナーン県山岳民族開発福祉センターの関心事は彼らをいかにして経済的に自立させるかということであった。センターは有識者会議を開いて色々な案を募り、試みたがどれも成功しなかった。「原始的なムラブリ族」を森林地帯に住まわせてく「生きている博物館」にするという案はかなり早くから出ていたようである。ナーン県山岳民族開発福祉センターの所長からその話を聞かされた筆者は冗談だとばかり思っていたが、今回の移住プロジェクトはそれに非常に近いものである。その後、2003年ごろであったか、シンリントン王女がナーン県ファイユアック近くで、ミャオ族・ヤオ族とともにムラブリ族に謁見が行われたことがあった。その後、道路の舗装事業が始まるなど山岳民族をめぐる事情は大きく変わり始めた。

5 おわりに

このプロジェクトには莫大な予算が使われているであろう。それを可能にしているのはこれが特別なプロジェクトだからである。シンリントン王女の要請で森林局が動いたという政府高官の言葉の通りであるなら、1999年に立ち上げられた王室プーファー開発プロジェクト(Phu Fa Royal Development Project)が拡大する形で今回のムラブリ族の移住プロジェクトが実行されたものとみてよい。しかし、いくら予算が豊富でもこのプロジェクトの現状には、基本的にムラブリ族を幸せにし、彼らの言語文化の維持保存する上で望ましくない側面が多々あるのは確かである。土地は与えられず、収入は以前より下がり、厳しい管理下に置かれたプーファーにおけるムラブリ族の生活は他民族支配から役人支配になったようなもので、気ままに生きて来たムラブリらしい生活からは程遠い。同プロジェクトには様々な分野の専門家からなる委員会があると聞いているので⁷、このプロジェクトが軌道修正しつつ発展していくことが切に望まれる。

参照文献

- Chazée, Laurent(2000)*The Mrabri in Laos: A World under the Canopy*. White Lotus
- Nan, Sakkarin Na(2009)Resource Contestation between Hunter-Gatherer and Farmer Societies
In: Kazunobu Ikeya, Hidefumi Ogawa, Peter Mitchell(eds.). *Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: from Prehistory to Present. Senri Ethnological Studies*
73.pp.229-246. National Museum of Ethnology
- Oota, Hiroki & Others(2005), Recent Origin and Cultural Reversion of a Hunter-Gatherer Group.
*PLOS BIOLOGY*3(3)|www.plosbiology.org
- Rischel, Jørgen(1995)*Minor Mlabri*. University of Copenhagen: Museum Tusulanum press
- Trier, Jasper (2008)*Invoking the spirits*. Aarhus University Press

-
- ¹ Trier (2008 : 57)「私たちが1970年に始めてタイに滞在した時、あの素晴らしい山の密林が消えるとはまったく予想しなかった。しかし10年後には驚くべき速さの破壊が加速度的に進行していることは明白であった」
- ² sakkarin na nan mlabri database <http://learners.in.th/blog/mlabri-database/371827>
- ³ Chazée (2000)ではラオスに20数名いるとされる。
- ⁴ Trier (2008 : 57)参照。
- ⁵ Nan (2009:236)参照。
- ⁶ ムラブリ族が石器を使用したという証拠はない。
- ⁷ 委員会のメンバーである Nan 氏の直話。

